今こそ読むこの1冊

潮木守一
桜美林大学大学院招聘教授

角方正幸・松村直樹・平田史昭 共著
『就業力育成論』

（2010年 学事出版）

大卒者の就職が悪化するなかで，どこの大学も生き残りをかけて「キャリア開発支援」に力を注ぐようになった。ところがその内容を見るとバラバラ。大学設置基準が改定され，「社会的・職業的自立に向けた指導等の実施」が制度化されたが，どの大学も具体的に何をしたらよいのかわからない。筆者たちは5年ほど前に株式会社リアセックを立ち上げ，困っている大学のキャリア開発支援の組み立てにノウ・ハウを提供してきた。こうして蓄積した経験が本書にはふんだんに盛り込まれている。

求められる能力の多様化

かつての日本では製造業が最大の雇用先だったが，今や雇用先としては縮小する一方。一頃までは，その代わりに「第三次産業」の雇用機会が拡大するとされてきたが，その中身が一様ではない。そこで「サービス経済化」という用語が登場したが，よく見ると第三次産業だけがサービス化するだけでなく，農業も製造業も今やサービス経済化し始めている。かつての農民は黙々と農作業に打ち込めば済んだが，今や求められるのは顧客たちのニーズを汲み取り，それに合う商品を開発していくイノベーション能力である。

さらに大きなインパクトを与えたのが，情報のデジタル化，インターネット，ウェブサイトの出現である。今や農業も製造業もサービス産業も，市場の動向をいち早く察知するのに，ICT（情報通信技術）を使いこなさなければならない。今ではウェブサイトを立ち上げ，消費者と直結して情報を集め，新商品を開発し販売している農家は多くある。こうなれば農業，ICTといった専門能力も必要だが，それ以上にそれぞれ違った技術，発想，構想力を持った者同士でネットワークを作り，互いにうまく協調する能力が必要になる。

イベント共有型プログラムこそ能力育成の鍵

それではこうした能力はどうやったら身につくのか。そこで著者たちが主張するのは，誰かが上からの目線に立って教え込むのではなく，「受講者同士の情報交換・情報共有」が最大の鍵だとしている。これまでの学校や大学のカリキュラムは万事教壇の上から教え込むことを前提に作られてきた。しかしずっと以前から，こうした枠を崩そうという試みがあった。数年前，文部科学省が特色ある教育プログラムに特別予算をつけるプロジェクトを立ち上げたが，その時応募が多かったのが「体験学習」であった。教科の枠を超え，時間割の枠を超え，教師と学生の立場を超えて，ともに一緒になって取り組むイベント型のプロジェクトが多かった。

課題は大学という制度の組み換え

最近日本でもネットワークFacebookが話題を集めている。ことの起こりは，人付き合いの下手なパソコン・オタクのハーバードの一学生が，学生名簿がなくて不便している学生たちのニーズを受けて，写真入りの名簿をウェブサイトに立ち上げたことから始まった。それが今や世界中に広まり，創業者は今では世界最年少の億万長者になったという。この創業の過程を描き出した映画「ソーシャル・ネットワーク」で描かれているように，一つの事業を立ち上げるには，さまざまな人とアイデアの組み合せが必要となる。そこから巨万の富が生まれれば，利益配分をめぐって仲間割れが起こり，訴訟事件にまで発展する。チャンスのあるところにはリスクもある。人間は体験を通じてしか学ばない。本書がいうように，当事者同士の情報交換・情報共有が最高の教師だとすれば，それが実現できるように大学という制度の組み換えが必要になる。著者たちは結論で「答えの多くは，学ぶ人自身のなかにある」といっている。どういうキャリア開発支援を立ち上げたらよいのか困っている大学は，まずもって自分自身のなかを見ろと，本書は勧めている。